

仏道修学（真実の報恩）

『報恩抄』（定本一一九二頁・建治二年）

（本文）

仏教をならはん者の、父母・師匠・国恩をわするべしや。

此の大恩をほうぜんには必ず仏法をならひきはめ、智者とならで叶うべきか。譬へば衆盲をみちびかんに、生盲の身にては橋河（きようが）をわたしがたし。方風を弁えざらん大舟は、諸商を導きて宝山にいたるべしや。

仏法を習い極めんとをわば、いとまあらずば叶うべからず。いとまあらんとをわば、父母・師匠・国主等に随いては叶うべからず。是非につけて、出離（しゆつり）の道をわきまへざらんほどは、父母・師匠等の心に随うべからず。この義は諸人をもわく、頭にもはづれ冥（みよう）にも叶うまじとをもう。しかれども外典の孝経にも、父母・主君に随わずして忠臣・孝人なるやうもみえたり。内典の仏経に云く、「恩を棄て無為に入るは真実報恩の者なり」等云云。比干（ひかん）が王に随わずして賢人（けんじん）のな（名）をとり、悉達太子の浄飯大王に背きて三界第一の孝となりしこれなり。

（現代語訳）

仏教を習学し実践しようとする者は父母・師匠・国の恩を忘れてはならない。

この父母・師匠・国の大恩に報いるためには、かならず仏法を習い究めて智者とならなければならぬ。たとえば大勢の眼の不自由な人たちを導くためには、自分の眼が見えなければ橋や河を渡すことができず、また風の方向をわきまえない船がどうして大勢の商人を乗せて宝の山に行くことができるのかというのと同様である。

仏法を習い究めようと志したなら、時間のゆとりがなければできない。時間のゆとりを得ようと思えば、父母・師匠・国主などに随つたりして世俗のことがらにかかわってはいはならない。どのようなことがあっても、出離の道（生死を解脱する道、悟りの道、仏道）を体得するまでは、父母や師匠などの心に随つてはならない。このような考えかたは、世間のいろいろな人たちは、世間の道理にも仏教の教えにもかなうものではない、と思うであろう。しかしながら、外典（仏教以外の書籍）の孝経にも、父母や主君に随わないで忠臣・孝人となる、と書かれている。内典（仏教の書籍）の経文には「父母の恩を棄てて仏道に入ることは真実の報恩の道である」（清信士度人経（しようしんじどにんきよう））と説かれている。比干は悪逆（あくぎやく）の君主（紂王）に随わないでかえって賢人と称讃され、悉達太子は父の浄飯王に背いて出家し、かえって三界第一の孝子となられたことなどはその例である。